

アートパークを語ろう

大成 哲雄*¹ 北沢 昌代*² 石川 静枝*³ 榎本 孝芳*⁴

森 純平*⁵ 佐藤 牧子*⁶ 渡辺 あてな*⁷ シギット・ムルヤンシャ*⁸

大成：こんにちは。本日はお忙しい中お集りいただきありがとうございます。「アートパーク」は2008年から、聖徳大学と地域団体、松戸市が協力して、松戸中央公園で地域の子どもの為に造形ワークショップを考え、実践するアートプロジェクトです。この事業は、地域の課題に目を向け、学生の社会参画力育成が目的の一つとして始まりました。最初は、80名ほどの親子参加から始まり、回を重ねる毎に徐々に増え、3、4年前からは1000人を超えるまでになりました。松戸市中からたくさんの親子が参加し、アートを自由に楽しむ場が生まれています。「アートパーク」は、1日子どもと学生、大人が思いっきり遊んでみる事で、子どもの表現や、外遊びの大切さを参加者と企画者が体験的に理解し、それらを広く社会に発信していくプロジェクトでもあります。そこで、光の当て方によって、色んな顔を持っているのが「アートパーク」だと思っているので、10年やってきた節目という事もありますし、今までを振り返りつつ、関わってきて頂いている方々の専門分野の視点で「アートパーク」を語っていただけたらと思います。では、発表者について簡単にご紹介いたします。まず、教員養成、教育プログラムとしての「アートパーク」を聖徳大学短期大学部の北沢先生、よろしくお祈いします。続いて、聖徳大学教職大学院で勉強されていて、元幼稚園の先生でいらっしゃる佐藤さん、よろしくお祈いします。それから、聖徳大学児童学科の卒業生です。10回のうち5回参加している渡辺あてなさんです。

それから「アートパーク」のアートの部分ですが、アートの専門家であり地域でアーティスト・イン・レジデンスをやっている PARADISE AIR、東京藝術大学特任助教の森さんです。

続いて、3年前から千葉大学園芸学部木下研究室も参加しております。ランドスケープ・デザインの観点で「アートパーク」を語って頂きます。千葉大学大学院生のシギットさんです。よろしくお祈いします。

「アートパーク」には地域活動、まちづくりの面も強くあります。最初の立ち上げから10年一緒に活動してまいりました「クリエイティブまつど工房」理事長榎本さんにはまちづくりの観点でお話していただきます。

最後に同じく10年前の立ち上げから一緒にやってまいりました「NPO法人松戸子育てさばーとハーモニー」の石川さんです。子育て支援の観点でお話をさせて頂けたらと思います。

最後に、私、聖徳大学児童学科の大成と申します。今回の司会進行をやらせて頂きます。どうかよろしくお祈い致します。

「アートパーク」は先ほども言いましたが、最初は80名ぐらいの親子参加から、回を重ねる毎に倍掛けの人数になり、6回目には1000人を超えました。一番多かった回は1870名の親子が参加し、毎年楽しみに来てくれる子ども達がたくさんいる大きなイベントに成長しました。

私が科研でまとめた記録集に「アートパークで大切にしている事」を記しました。最初に皆さんと一緒に決めた事ではないのですが、活動やデイス

*1：聖徳大学 児童学部児童学科 教授、聖徳大学生涯学習研究所 研究員／*2：聖徳大学短期大学部保育科 准教授
*3：NPO 法人まつど子育てさばーとハーモニー 副理事長／*4：NPO 法人クリエイティブまつど工房 理事長
*5：PARADISE AIR、東京藝術大学特任助教／*6：聖徳大学教職大学院教職研究科 元幼稚園教諭
*7：聖徳大学生涯学習研究所 職員、聖徳大学児童学部児童学科 卒業生／*8：千葉大学大学院園芸学研究科 木下勇研究室

カッションをやっていくうちに、見えてきたものです。記録集には覚え書きのような感じですが書いてみました。

まず、「子ども達の『やりたい』を大切にし、応援していく活動」であること。「場所を活かした活動」であること。松戸中央公園だから出来る活動を考え実施します。また、「大学と地域の協働による活動」であること。「新たな学びの方法を考える」。昨今、アクティブラーニング等様々な学び方について耳にする事があると思いますが、「アートパーク」はこの学び方をプロジェクトの中で考えていく活動でもあります。

少し、おこがましいことではありますけれども、「地域に文化を作っていく」そういう活動でもあると思っております。それから最後は「地域活動のノウハウを構築」という事に関わっていく皆さん方と次の世代の地域活動を牽引していける人材もこのプロジェクトを通して作っていきたいと思っています。

それでは、紹介の順番でパネラーの方に7分ずつお話をして頂きます。まず教育関係は3人続けてお話をさせて頂いて、その後15分ぐらい皆さんとこのテーマについてトークをします。

その次にアートとランドスケープ・デザインで発表をして頂いて、その後も皆さんで15分ぐらい考える時間を作りたいと思っています。

次にまちづくりと子育てで、お話をさせて頂いて、また15分ぐらい全体トーク。それから最後は「これからのアートパーク」ということで、意見交換出来たらと思います。

大 成：はい、ではまず、最初の北沢先生よろしくお願ひ致します。

北 沢：はい。こんにちは。聖徳大学短期大学部の北沢と申します。「アートパークとは？」という事でフリップを用意するようと言われてましたので、私は「3つの主体性に貫かれた学びの原点」と考えました。それでは話を進めさせていただきます。

パワーポイントにも書かせて頂きましたが、私は「アートパークとは、3つの主体性に貫かれた学びの原点である」と考えています。

なぜなら、今の教育に足りないもの、それは「主体性」だと考えたからです。今年の3月には、新しい学習指導要領が告示されました。また大学に

おいては学士力とか社会人基礎力が求められています。教育に対する研究が進みまして、何をどのように身に付けさせるのが明確に示されています。

例えば、授業にはシラバスがありますが、その授業の1コマ1コマにその授業を学生が受けるとどのような、資質能力が身に付くのかを示すことになっています。シラバスを執筆しながらもどこか、「1コマ1コマでそんなに学生の能力が身に付くのかなあ」という事を、腑に落ちない気持ちで書いております。私には、こうすればこのような学生が作れるといった、工業製品のような製造方法を示しているような気がしてなりません。

学びとはもっと本来おらかで、自由であいまいな中で学生や子ども達が試行錯誤を繰り返しながら、自分で学んでいくものではないかと思ます。「アートパーク」には、このような今の教育に足りないものを持っている学びがあると考えました。

そして、「アートパーク」の学びのスタイルを整理して考えると、「アートパーク」には3つの主体性があると考えました。

1つ目は「アートパーク」には、参加の主体性があるということです。「アートパーク」は教員も学生も地域の方々も親子も、強制されて参加している人はいません。自由意志の参加です。自分の意志で参加している訳ですから、責任も自分にある訳です。大変だったとしても誰かのせいには出来ません。

2つ目の主体は、主体的な学びのスタイルです。「アートパーク」のような取り組みはプロジェクト学習と言われてます。旧来の学びのスタイルに対して、プロジェクト学習は、学生と教員が一緒になって目的に向かって様々な問題を解決しながら学んでいきます。「アートパーク」の場合は、「アートパーク」の実施が目的になります。プロジェクト学習は主体性が出発点です。

それから3つ目の主体性は、「アートパーク」は芸術を主体として行っている点です。芸術自体が主体的であり、自由な意思で行われるものです。今あるものに新しい視点を生み出す活動が芸術です。

このように「アートパーク」は「参加の主体性」「スタイルの主体性」「芸術の主体性」とした3つの主体性で貫かれていて、教室の中では学ぶ事の出来

ない学びの原点がそこにあると考えました。

ここで、「アートパーク」のスライドから学びの原点だと思われる姿を紹介したいと思います。これは私が大好きな写真の1枚ですが、2012年のワークショップの写真です。公園に画材を持ち込み、学生が環境の設定をします。そこに赤ちゃんを連れてお母さんが来て、赤ちゃんの足に絵の具を付けてスタンプングをさせようとしています。初めての体験に赤ちゃんは緊張していますが、お母さんが支えています。またその周りを学生がいてその親子を応援しています。まさにこの光景は、「アートパーク」の原点だと考えています。

それから次に、今年行った「みんなのたからじま」のワークショップの様子です。自分だけの宝箱を作ろうというワークショップですが、左の写真は子どもが1人で黙々と作っています。また、右側の2枚は親子や学生と一緒に作る事を楽しんでいます。左側の女の子は初めから終わりまで4時間近く時間をかけて作品を作っていました。出来上がった時には1つ1つの工夫を自慢げに説明してくれました。また、右側の男の子は制作中に話しかけても無愛想にあまり答えてくれなかったのですが、出来上がった時には嬉しそうに「写真を撮って」と言われました。

このような参加者にも自由な主体性が保証されているのが「アートパーク」であると考えています。これが「アートパーク」の魅力であると考えます。

このような「アートパーク」では、学生のどのような資質や能力を育てているのでしょうか。

「アートパーク」で育つ学生の力を周囲に対して示す必要性を感じて、川村学園女子大学の桂先生の協力を得て調査する事にしました。学生に対し「アートパーク」の事前と事後にアンケートを行いました。調査対象は大成ゼミ、西園ゼミ、永井Grそれから、北沢Grと運営をサポートしてくれた児童文化コースの学生です。

調査項目は準備時間や活動時間、活動内容として、子どもとの関わり、保護者との関わりファシリテーターとしての活動、材料、準備などの整理時間といった基本事項と、学士力の観点から「アートパーク」と関連する項目を教育的実践力として6つ、チームワーク、リーダーシップ、市民としての社会的責任、コミュニケーションスキル、問題解決力、知識理解、総合的な学習経験、創造的

思考を調べました。

時間の関係で事前、事後の活動時間とか、活動内容の結果をお見せ出来ませんが、教育的実践力の結果を示したいと思います。

教育的実践力を比較したところ、優位な変化があったのは、チームワーク、リーダーシップが0.8ポイント上がり、コミュニケーションスキルが1.02ポイント、総合的な学習経験と創造的的思考力0.9ポイントで同じように伸びている事が分かりました。また、活動時間や活動内容などが、教育的実践力に及ぼす影響を検討するために分析を行ったところ、優位な効果が見られた項目としては、子どもとの関わり、材料準備などの環境整備などが多いのと、チームワーク、リーダーシップ、市民としての社会的責任、問題解決力、知識理解が高まる事。それから、当日の活動時間、子どもとの関わり、材料準備などの環境整備が多いほど、コミュニケーションスキルが高まること。それから、材料準備などの環境整備が多いほど、総合的な学習経験と創造的的思考力が高まる事がこれで分かりました。

要するに子どもとの関わり、当日の活動、材料準備などの環境整備が多いほどこれらの教育的実践力が高まる事が分かりました。これからの課題としては、保護者との関わり、ファシリテーターとしての活動が、なぜ教育的実践力の変化に繋がらなかったのかを検討する事があげられます。今日は時間の関係で分析結果の考察は致しませんが、この後のディスカッションの材料にして頂けたらと思います。駆け足ではありましたが、教育の視点から見た「アートパーク」の意味や学生の伸びる力について報告致しました。ご清聴ありがとうございました。

大成：北沢先生ありがとうございました。

続いて本学教職大学院の佐藤さん、お願いしたいと思います。

佐藤：教職大学院の佐藤と申します。3月まで幼稚園に勤めていました。よろしく申し上げます。

私は「アートパークとは、ありのままを受け入れられる場所」という風に考えました。それでは、発表していきたいと思います。

まず一言で言うと、私は今回初めてアートパークに参加して「求めていたものはこれだ！」という

感覚がありました。本日は参加してくれた元教
子たちのインタビューなども紹介しつつ、親御
さんや保育者、幼稚園教諭として感じた事
をお話させて頂こうと思っています。

「アートパークは、ありのままを受け入れ
られる場所」。なぜならば、親御さんのアン
ケートに「あっそういう所があるんだ」と
我が子の個性を受け入れている姿がとて
も多く書いてあった事から感じた事
です。幼稚園で行うアンケートや面談
では大抵この手の質問になると、親御
さんはどうしても、良いとか悪いとか、
気になる、直したいという事が基準
になる回答をしがちなんですが、今
回の回答はこういう基準ではなかつた
というのがとても印象深かったです。

幼稚園で親御さんと接していると、我が
子の事をありのままに受け入れる事の
難しさを日々痛感していました。この
事があったので、今回「ありのままに
受け入れられる場所」という事にしま
した。では実際、親御さんの言葉を
借りつつ、子ども達をどう見たのか
という事を説明していきたいと思
います。最初に、「この子は小さい頃
海に行っても、足に砂が付くのが嫌
で遊べなかった。いつの間にかこんな
風に遊ぶようになったらう」次の子
は「馴染めるか不安でしたが、想像
していたよりも絵の具まみれになっ
て全身で楽しんでいました。なんの
躊躇もなく大胆に次々制作、色塗り
などをしている様子は家庭での創作
時にはなかなか見る事のない姿だ
った」「当日は人に圧倒されていた
ようです。ゆっくりのんびり作業す
るのが好きな様です」「自由な色
塗りで解放感もあり、喜んで参加
すると思っていたのですが、好きに
自由に塗ってもいいんだよと言っ
ても、どんな風に？、どうすれば
いいの？となったり、思いのほか
汚れる事を気にしている姿に驚
きました。どこまでやっていいか
考えつつ、徐々に羽目を外し楽し
むようになった。時間制限がな
かつたら、どこまでいくのか見
てみたい気がした」最後が、「大
人はアートだけに目を向けていま
すが、子どもは緑の中を自由に
走り回り、時々アートに近寄
るというスタイルでした。あれ、
と思いましたが、ゆっくり考
えてみたらそれが自然な事なの
かなと思いました」。

では、受け入れる事を難しくしている原因
というのはどこにあるのだろうかと思
えたら親御さんの

不安感、そして自信のなさ、孤立感とい
ったものではないかと思っています。周
圍の目を気にして親御さん自身は、
いいと思っけていても、他人から
我が子が悪く思われたくない、自
分も嫌われたくない、自分の子育
ては合っているのかな、本当の
事を相談できる相手がいないとい
った親御さんからの相談が幼稚
園の現場では絶える事ありませ
ん。ですので、子育て中の親御
さんの不安感、自信のなさや孤
立感はとても深刻な問題だと考
えています。

ですが、実はこの問題というのは親
の問題だけではなくて、教育現場
の先生にとっても全く同じ心
情です。幼稚園教育の指針である
幼稚園教育要領の最初に、「幼
稚園は安定した情緒のもとで自
己を十分に発揮する事により、
発達に必要な体験を得ていく
ものであるという所」とあるん
ですけども、つまり子育てや教
育においては安定した情緒の
もとで安心できる環境のもと
で子育てや子どもの教育にあ
たる事が大切であると言っ
ているんですが、子どもをとり
まく周囲の大人が安心できる
環境にない限り、子どもに
その環境を提供する事は困
難ではないかと考えます。

しかし、実際「アートパーク」にお
いては、親御さんが目の前の
子どもをありのままに受け
入れる姿があった事は事実
です。私はその要因を「ア
ートパーク」の2つの要素
が大きく影響しているの
ではないかと考えました。

まず1つ目が、「アートの力」
です。自己表現の自由が活
かされたアートを通して、
単純に正解を求める活動
から子どもだけではなく、
同時に大人も自己解放
されていきました。そして
小さい子から大人まで
初めて会った者同士も、
アートを通して言葉が
なくてもコミュニケーション
を図ることが出来て
いたのもアートの力だ
と思います。

そして2つ目は、「大学
を含む地域の力」です。
地域は、楽しみ、共感
し合える場と、受け
入れられる安心の場
を提供していました。
アートを通して自己
解放し、表現し活動
する我が子を周囲の
人が自然に受け入れ
てくれるのを見て、
親御さんは初めて
安心して我が子を
そのまま受け入れ
る事ができたの
ではないかと思
いました。そして、
受け入れられた
我が子と共に親
御さん自身も
受け入れられ、
解放されたのだ
と思います。

事実、私自身も、教育にあたり
大きな不安や孤独

を感じていた自分がいた事に改めて気付かされました。さらに「アートパーク」を体験して、「この夏は親子で色々なワークショップに参加してみました」という親御さんの話もありましたので、今までになかった新たな子育て環境、教育環境の提示もなされていたのではないかと思います。

次に、教育、幼児教育の課題というのは山積していますが、それに対して「アートパーク」はたくさんの方の可能性を秘めているのではないかと感じましたが、具体的な内容は、時間があればご紹介したいと思います。

最後に「アートパーク」の良さは入れ込み過ぎない曖昧さが残されている所にあるのではないかと考えています。曖昧さ、そのものが持つ強さと可能性を大切にしてください。「アートパーク」の良さが継承されていく事を願っています。そして「アートパーク」のようなイベントを通してもっと教育現場と、地域と家庭が手を取り合って、大人も子どもも安心して自己を十分に発揮していける環境を作っていけたらいいなと考えています。以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

大成：佐藤さん、ありがとうございました。

それでは「教育」の最後は渡辺さんお願いします。

渡辺：聖徳大学児童学科卒業生の渡辺と申します。私にとっての「アートパークとは社会への一歩」だと思っています。何故かというお話をする前に、まず私と「アートパーク」の関わりをお話します。学生時代にどうやって「アートパーク」と関わってきたのかというお話から、卒業してみたら「アートパーク」って自分にとってこんなメリットがあったんだとか、こんな成長があったな、みたいなのをふり返らせて頂ければと思います。ざっくりなんですけど、入学して美術部に所属していて、そこで初めて「アートパーク」に参加しました。2年生になっても美術部に所属していて、その時も部活として参加。3年生になった時は大成ゼミから「アートパーク」に参加させていただきました。4年生になっても7月とか就活で忙しい時期なんですけど私は早めに内定を貰っていたので、「4年生お助け隊」という自分で企画を出す側ではなく運営のサポート側で参加させていただきました。今年の「アートパーク10」も、会

社の休みを取って遊びに来ていたので、この5年間で企画側、運営サポート側、お客さん側を全部やっている事になります。

さて、やってみてどうだったかというお話です。1,2年生の頃は、私には率先して案を出したり仕切ってくれたりする先輩がいてとても頼りにしていましたが、実は「意見出しちゃいけない」と思ってやっていました。先輩がこう言うから、その通りにしておこうとか、先輩がやるって決めたから言われた事とか頼まれた事をやっておこうみたいな思っていたんですね。そしたら責任感っていうのは生まれてこないんです。部活のお手伝い感覚で、結果、「当日子ども達と触れ合って楽しければいいな」と思ってやっていました。

そんな私も3年生で変わりました。大成ゼミに入ってから「自分達で考えて動く」という事をやり始めました。3年次ゼミは先輩後輩もないから意見も責任感もみんな平等なんです。「自分達がやらないと成り立たない」とみんな思っていたみたいで、責任感の向上に繋がったと思います。

でも私ここで一回壁に当たったんですよ、3年生の時に。今まで先輩に頼っていた分、自分で考える事をしなかった分、頭が固まって企画案とか改善案とか全く出てこないんです。そんな時に3年生から初めて「アートパーク」に参加しましたっていうゼミ生達と意見出し合っていると自分だけでは思い浮かばなかった案や意見に出会えて、「あ、なるほどな」とか、「そういう切り口があるのか」って楽しくなってきたんですね。

そして、大学1年生から社会人1年生まで、なぜ私が5年間「アートパーク」に参加し続けたかって事なんですけど。実は今までの学生の中で、5年間通して「アートパーク」に参加している人って多分私しかいないんですよ、自分調べですけど。そんな中で私が、どうして会社の休みを取ってまで参加し続けてるかっていうと、楽しいとか地域のお世話になっている人に会いたいとか大好きな先生に会いたいたいっていうのも、もちろんあるんですけど、何が一番かって言うと私はこれ、「リベンジ」。「アートパーク」10回して、結構「アートパーク」自体のフォーマットとか決まってきたとは思いますが、どんなにみんなで計画して、「よしこれでいこう！」って実行しても毎年何かしら課題って出て来るんですよ。もっと

こうした方が良かったとか。それは運営側にしても企画側にしても課題ってというのは絶対出て来ちゃうんです。そしたら悔しくて、「ようしやりきったぞ！」ってなるにはなるけれど、「ここもうちょっとこうした方が良かったよね」というしこりのようなものは出て来るので。そうしたら「来年こそもっと良くしてやるぞ！」って、リベンジの精神で私は5年間参加し続けていますね。これ、実は結構大事な事だと思っていて、卒業して社会人になってから分かったんですけど、PDCAっていう問題解決のサイクルと私のリベンジ精神でやっていた事は同じだと思って。「Plan, Do, Check, Action」で「アートパーク」を計画し、実行してみて、終わったら活動を評価する。何が良くて何がダメだったのかって考えて、また次の年にアクション（活動）してみる。これ、今の職場で大事にされている事で、問題解決が出来る人って成長のスピードがすごく早いですよ。私自身もとても大事だと思っていて、できれば学生のうちに身に付けて欲しい力だと思います。

もう1つ今だから思う、今のうちに学生に身に付けておいて欲しい力というのがあって、それは「社会人基礎力」です。働きかけ力とか、課題発見力とかストレスコントロールとか色々あるんですけど、これ全部「アートパーク」を企画運営側でやっていたら身に付く力だと思うんです。たまに、こういうの、意識していなくて自然と出来る子っているんですよ。クラスに1人とか、ゼミに1人とか。そういう子ってみんなからどう思われているかと言うと、色々な事に気付いて率先して動ける子、自分の意見を言える子。総括してあの子すごいねとか、あの子に仕事任せたいとか、そう思われる子ですよ。

でも、私は逆も思うわけです。意識してやっければ誰でも出来るようになる。「アートパーク」って社会に出る時に必要な能力を上げられるだけのポテンシャルはあるんですけど、実は「楽しめればいいよ」とか、「子どもと絵の具まみれで遊べればいいや」とか、「子どもと絵の具まみれで遊べればいいや」とか、考えてる子結構いっぱいいると思うんですよ。全然いいんです、それで。楽しむことが大前提なのでそれでいいんですけど、でもそれだけでは少しもったいないかなと。意識して問題解決したりすれば誰だって成長のできる場があったと、私は実際に経験して感じるわけです。

最後に、私がかんない事がどうしてもあって、問題提起をさせていただきます。「アートパークに学生が大事か」って事です。今話した通り学生からしたらメリットはとともあるんです。でも「地域から見て」、「子どもから見て」、「大学から見て」、学生がいる事がどのくらい大事なのかっていう事がわからなくて、それをできれば今日のお話でみなさんからお聞きしたいです。では発表は以上です。ありがとうございました。

大成：ありがとうございました。それでは「教育」を切り口に3人の方に発表して頂きました。今、渡辺さんから問題提起、「アートパークに学生が大事か」という事なんですけれども、いかがでしょう。どなたかお答え頂けますか。

榎本：はい。榎本と申します。「今、学生が大事か」って聞いて、とても大事ですね。松戸には4つの大学があるんですが、私達はまちづくりの視点で、大学生さん達に地域にどう関わってもらえばいいのだろうと、ずっと考えやってきました。大学生さんっていうのは全国の色んな地域から来るわけで、その人達に松戸の事を知って頂いたり、学生さんが社会人になって、また松戸と関わったり、色々なメリットが市にも個人にもあると思っています。もちろん聖徳さんもそうなんですが、千葉大園芸学部さんとか、流通経済大学さんとか、日大松戸歯学部さんとか4つも松戸に大学がある事は凄い事です。これは実は松戸市にとっては大変に恵まれた事なんです。そんな中で色々な形で学生の力、専門性を使って地域に関わって頂いたり、学生さんならではの視点を活かして頂けるといいと思っています。以上です。

大成：子どもに聞いてみましょう。「アートパーク」でお姉さん達と遊ぶのは楽しいですか。

子ども：楽しいです。

大成：私は絶対に「アートパーク」は学生がいて成り立っていると思ってのんです。まだ何者でもないとか、社会人でもない、先生でもない、ファジーな人達がこの「アートパーク」をファシリテーターとしてメデイウムのような役割で盛り上げていると思っています。これをプロや、大人だけでやっていたら、ありきたりの、あまり面白くないものになっているのかもしれないと思います。学生というこれからの人が一生懸命やったり、守り

に入っていない活動がおそらく、「アートパーク」をより魅力的にしているんじゃないかと思っているんです。

あと、時間がおしてしまっていますが、北沢先生に発表して頂いた内容で、もうちょっと先生がお話ししたい事ありますか。伸びる力に対し、このような結果が出た事をどのように思っていますか。

北 沢：今、渡辺さんの方から社会人基礎力の話が出ましたけれども、結局大学の教員としては学士力であるとか、社会人基礎力を育てるという事が求められているので、今の授業の枠ではそういったもので育ち切らないんじゃないかという事を私は言いたかったんです。別の形を取らないとそういった力って育たない。それが「アートパーク」を代表するような学外とか課外活動じゃないかっていう事で大成先生達と話合っ、「こういう力が、ずっとアートパークでは育ってるよね」という事を学士力の中から抽出して、それが本当に事前と事後で育っているんだろうかという事を、学生に事前、事後アンケート調査をして、あのような結果が出た訳ですね。

でもまだこれ、分析の途中なんですけども、やはり、子どもと多く関わる。それから材料や物の準備、環境整備をよくやる。活動時間をしっかり設ける事で、いわゆる学士力が育つという事がアンケートの分析結果からも出ました。つまり、大学生にとってこういう活動をする事は大切な事なんだと示されたと考えています。

大 成：はい。ありがとうございます。では、ここで一回「教育」の視点は終えたいと思います。最後また時間があったらお願いします。

大 成：続いて、「アートからみたアートパーク」という事で、アートの視点でお願い致します。

森：はい、PARADISE AIRの森と申します。よろしくをお願いします。

まずはPARADISE AIRの事をざっくりとお話します。私達は松戸駅の西口にあったラブホテルを利用して、アーティストが街に滞在をして、何かをするというような活動をしています。具体的にはアート活動を365日ずっと街中のいろんな場所でやってる、みたいな事を想像して頂けたらいいのかなと思います。

2013年から運営を開始してるんですけども、聖徳大学さんにもお世話になっていて、合計100人以上のアーティストが松戸の街に滞在をして色々な活動をしています。例えばアメリカから来たりとかコロンビアからとかスペインから来たりとか、オーストラリアから来たりとか。日本人も海外を拠点にしたアーティストが滞在をしたりしています。

最近、彼女の映画が出来たんですけども、サラリーマンをテーマにした映画を日本で作っていて、そのためにどこか居場所はないかっていう事でPARADISE AIRに滞在をして、松戸市役所をリサーチさせて頂き映画ができました。

大 成：そうなんだ。

森：PARADISE AIRは2016年から「アートパーク」に参加させて頂いて、先程流れていた映像にもあったんですけども、マリリンというベルギーからきたアーティストがその年は担当しました。

具体的には、参加者の方々に「あなたが今一番行きたい場所はどこですか」という質問をして、こういう風にポーズをとっているんですけど、この裏にブルーグリーンのスクリーンをセットして、そこで写真を撮ります。これはオーロラを見に行きたいという事で、こういう風にポーズをとっています。彼はサーカスに行ってみたい。実際、実物のサーカスの背景がある訳じゃないので、みんなサーカスの絵を想像しながら演じています。彼らは確か、「ハリーポッターの世界に行きたい」と言ってこのポーズをあれこれ考えています。

もう一人韓国からジャイブ・リーっていうアーティストがいて、彼女は、子ども達と触れ合う事はなかったんですけども、アートパークのゲートみたいな大きな木の周りで、このようにずっと一日中作っていて、たまに子ども達に声を掛けられて「これなんなの？」って聞かれたり、そういう事をやりました。今年は松戸を拠点にして下さっている山口静さんという方がリトミック風の小さなワークショップをしてみたりとか、松戸を拠点にしている菅隆紀さんというアーティストが、何でも落書きが出来るような黒いボードを用意して、活動しました。実はこの裏にマスキングテープで彼の絵が隠されていて、「アートパーク」の終盤になったらみんなそれを剥がして、彼の作品として絵が完成するという様な事をしてい

ました。
僕が「アートパーク」に思った事として、「アートパークとは箱舟である」というタイトルをつけたいです。確かにこの瞬間瞬間で子ども達が色々なアート活動を通じて、自由になるって事もあるかもしれませんが、一番はこれをきっかけに、例えばフランス人のアーティストと何かやってみたりとか、普段想像もしないような世界の事を想像してみて、それを実際にしてみるとそれが作品になったりとか。

僕らは、どちらかと言うとそこに参加した子ども達が10年後20年後とかにフランスにふと行った時に思い出したりとか、30年後とかに宇宙は身近になっていて、宇宙で最初に思い出したのが「アートパーク」であったりとか、そういう色々な種みたいなものを子ども達の中に埋められたらいいなと思っています。その種というのは、テーマとかある程度縛られてしまうんですけど、全然知らない国から全然知らない個性を持つアーティストが年間に30組とか40組ぐらい来てるんですけども、その彼らが自分で勝手にやってる世界に引き込んでもらう事によって彼の世界に連れてってもらいたいな事とか出来ると思いかないと考えて活動しています。

写真をご覧ください。一人だけこの、右側に座っている高校生なんですけど、去年 PARADISE AIR で「Let's 体験」というまた別の活動で、インターンになるという授業をやった時に参加しました。PARADISE AIR で2日ぐらい活動していく中で、すごくその雰囲気が入り込んでくると、その後、部活が終わったら PARADISE AIR に来てくれて、恋愛相談を受けたりとか、海外アーティストに「どうしたらいいのか」と素直に相談をしていて。「PARADISE AIR で働きたいんですけどどうしたらいいの?」と言われてたりとか、ちょっとこれは別の話になってしまうのかもしれないけど、あまり想像していなかった世界の扉が開くというのがアートの力かなと思って、これで具体的に何っていう訳じゃないと思うんですけど、そういう色んなきっかけを与えられればいいかなと思って活動をしています。以上です。

大 成：ありがとうございます。それではシギットさん。ランドスケープ・デザインの観点でお願いします。

シギット：こんにちは。千葉大学のシギットです。すみません。これからの発表は英語です。

(日本語訳)

本日は、「アートパーク」について私の経験を発表、話し合う機会をいただきましてありがとうございます。私にとって「アートパークとは場所を作ること」です。

私の自己紹介をいたします。私の名前はシギット・ムルヤンシャ・エフシニです。長い名前です。日本の友達にはシギットと呼ばれています。呼びやすいですよ。千葉大学の博士課程です。

修士課程以降、ここにやってきました。今年で3年目になります。私の専攻は木下勇先生の景観設計、都市科学です。

私は公共の場所を含めた空間についての研究をしています。

私はインドネシアから来ました。今日お話するのは、景観の観点からの「アートパーク」です。まず見なければならぬのは「アートパーク」は松戸中央公園の中で行われるという事です。松戸中央公園は一般的な場所であり、時とともに変化していく場所です。松戸中央公園は駅の近くにあります。これは特別な場所ですね。「アートパーク」が一般の空間にアートを提供することはチャレンジです。

アートの場所をどのように作っていくのか? アートパークの空間を3次元的にどのように再定義するのか?

このスライドは例です。ここは普通の場所ですが、ここをどのようにアートの場所へと変化させるのかを示しています。この空間を使って行ったアクティビティが沢山あります。ダンスや様々な活動などです。そして、なぜアートが重要なのでしょうか?

これは私の意見ですが、一般的に、アーティストが発表する時、まずアーティストの情報を知らせます。これによって、アートの独自性を示します。人々はアーティストが何を制作しているのかわかりませんし、プログラムの内容を知らないのです。そして、それだけでは持続可能性が少ないです。「アートパーク」では、地域社会に参加してもらう努力をしています。子どもやその両親、大学や「アートパーク」を訪れる人々です。そして、グローバルランドスケープに持続の可能性が生まれるこ

とを期待しています。これは、私が「アートパーク」に参加して以降の例です。そして松戸中央公園がどのように日々使用されているのかを観察しています。ほとんどの人は松戸中央公園をあまり使っていません。ただ訪れて、何もせず去っていきます。

しかし、「アートパーク」では、沢山の人々が来て、一日公園を楽しみ、子どもたちは、木登りなども経験します。これは、どのように場所を使ってアクティビティをするのかに関する理論です。

そして、その場所で何かを経験することで、人々はその場所を記憶します。それによってその場所にアイデンティティが生まれます。アートパークは新しい記憶として心に残ります。そこに参加した人々に認識されます。これによって、人々はアートパークに特別な意味を持ちます。

まずはじめに大切なのは、「記憶に残る」ことです。人々に「アートパーク」でどのような経験をしてもらうのか。

2番目は「場所」です。ゲームや活動が場所に意味を与えます。

3番目は、「シンボル」です。松戸市に新しいシンボルを与えます。

最後は、「広く認識してもらうこと」です。「アートパーク」完成後、もしくはその前に、アンケート調査をします。「アートパーク」をどう思いますか？どのように感じますか？と質問します。活動の質や場所の感じについての質問もします。

「アートパーク」は、アートだけでなく、他の活動にも参加できる場所です。

沢山の人々がその場所において、ピクニックをしたり、遊びをしたり、広場を使います。

「アートパーク」は人々がコミュニケーションをする重要な場でもあり、アートについての理解を深める場所だと考えます。以上です。

大成：ありがとうございます。今、「アート」という事で2つの観点でお話をさせて頂きました。お二方に質問でもいいですし、何かアートという事でお話したい方がいらっしゃったらお願いします。

佐藤：森さんに質問なんですけども、実際に参加されたアーティストの方が「アートパーク」に関してどのような意見を持ったのかをお聞きしたいです。

森：まず正直な所、マリリンは「すごく疲れた」って

言っていて、次の日から3日ぐらい寝込んでしまいました。とはいえ、こんなに子ども達と活動できるっていう事はなかなかないと思うので、やっぱりみんないい経験だったという話をしています。

あと、「アートパークを狙って来たい」という海外アーティストが結構いるんですけども、僕らの方でも部屋があまりないので受け入れきれず、今回は日本人のアーティストになりました。海外のアーティストがもっと「アートパーク」に関わりたいなと思っています。

大成：それでは、私からですけど、最近アーティストは随分こういった地域活動をやったりとか、プロジェクト型の作品という事で、様々な人と関わる事が多くなってきたと思います。アーティストが子どもと一緒にアート活動をやるという事にどのような意味があるのでしょうか。

森：僕らの活動の場合は、「アートパーク」の1日で何かを達成するというのではないと思うし、せっかくこういう子ども達と関わり合える期間にどんな実験が出来るかなっていう事を一緒に考えるようにしています。それは、先程おっしゃった渡辺さんの「学生が必要か」っていう時に、何が重要かかっていう事で僕は、基本的に子どもの事を知らないとか、色々試行錯誤が出来る場だと思っていて、それによって毎回毎回違うトライをするためにプランをたてています。活動の中で色々気が付くというか色々な発見があるので、特に何も縛りはせず、注意すべき点は、「あんまり頑張りすぎると大変なので、やり過ぎない様にしようね」ってアーティストには言いますが、よく分からなければ分からないでいいのかなと思って。マリリンの活動は、すごく分かりやすかったんですけど、他のアーティストは同じ空間で自由にやりたい事をやってると思うんです。それを見て子ども達は勝手なりアクションしてくるので、「まあ、そんなもんでいいか」という風に気楽に考えて楽しんでいます。

大成：そんなに構えてないんですね。あと、どなたかいらっしゃいますか。大丈夫でしょうか。

大成：はい、それでは次、榎本さんに「まちづくり」から見た「アートパーク」という事でお話を伺いたいと思います。

榎本：こんにちは榎本です。私、まちづくりという視点でずっとこちらに関わってまして、森さんの方から PARADISE AIR のお話がありました。私達は今からもう、7、8年前ですかね。その頃から「アートを使って町の活性化をしよう」って事があって、それをずっとやってきました。実際には2010年に初めて松戸で「常盤アートライン（松戸アートラインプロジェクト2010）」が実現したんですけども、それをするのに大体7、8年かかっています。で、アートと松戸市がどういう関係にあるかと言いますと、皆さんまちづくりって言いますと、たいてい、松戸市の方ここにいらっしゃいますし、私も地域振興課だとかとまちづくりもやってたんですけども、だいたいですね、どこの町も課題解決っていう話になるんですね。課題を解決するために色んな形でみなさんと力を合わせて行うんですけども、だいたい課題解決っていう所に来る人達は、ちょっと言葉は悪いんですけど、町の悪い所あげろって言うと10個ぐらい上げられるんです。でも、いい所あげて下さいって言うちょっと思い浮かばないと。「アートパーク」は私達の「夢と希望」ですね。どういう事かと言いますと、今言ってる様に、まちづくりにアートを使うということは、皆さんが手を組むのに、一番組みやすいという事です。例えば、課題とか何かで、組むという事になりますと、だいたい損する人と得する人が出てきて色々ひずみが出るんですね。ところがアートだとかそういう物を使った時には、文化とかアートと違ってそんなに当たり障りが少なくてですね、手が組みやすいと思っています。そこで実際に色んな人達が力を合わせて、成功体験を積んでいけばいいと思っています。少しずつ活動の中に課題解決を入れて行けば、皆でこんな事したらこんな事が出来るのかっていうことで、少しずつ入れて行けばいいんだと。私はそういったこともあり、ずっとアートでまちづくりをやろうとやってきました。私は常盤平団地にこだわりがあるものですから、常盤平団地で色々やりたいと思って、もう15、6年前からやってきています。残念ながら常盤平ではうまく出来なくて、東京芸大がやっている取手井野団地（取手アートプロジェクト）のような形をイメージしていました。芸大の渡辺好明先生も取手でやるずっと前に常盤平に見学に来た事も

あったんです。

そういった時に聖徳大学との話があって今にいたります。先程、渡辺あてなさんからも大学生の関わりの話があったんですけども、私達は非常に学生さんが大事だと思ってる訳です。学生さん、子ども達は本当に松戸の宝だと思っています。地方から来て、こういった体験をして、松戸にいい印象持って帰ってもらったり、実際に松戸にいくつかの実績を残していく事はとても大事な事ですね。そんな事で、「アートパーク」は、最初の頃から私達よく知ってるんですけど、最初はなかなかアートと言ってもたくさんの方が、簡単には集まらなかったですね。やはり継続というのは力ですね。

私達の原点は江戸川でコスモスの花を植えてるような活動で、これが22年続いています。その時産まれた子どもは、もう成人を迎えています。榎本さん達のまちづくりは「花咲かせてるだけなの？」と言われた事がありましてですね、いや、そんな事はないと。町も変えられるんだって事で、常盤平で「トキサイ」を2007年ぐらいから始めて、月1でやっています。年に1回ぐらいだとなかなか町って変わらないんですね。「トキサイ」は、この間10年を迎えて100回目を迎えました。月1で100回。

それともう1つ、私達の大事な事は、誰からも頼まれてやっていません。どこからもお金を貰っていない。勝手にやってるんです。「アートパーク」もそういった形で、アートを使ってどんどん活動が広がればと思ってお手伝いしています。私達は、アートパークで何をしているのかって言いますと、設営の為にトラック2台ぐらい持ってきて、材料や道具をひたすら運ぶ。それから活動中は、絵の具だらけになった子ども達を水でひたすら洗う。一生懸命洗っています。おそらく家では、あんなに絵の具だらけに遊ぶ事が出来ないんだと思いますね。それから終わりに、ひたすらゴミと、撤収をトラックで行います。やっぱりこれはとても大事な事で、まちづくりでもアートでもそうなんですけど、色んな役割の人がいるんだって事です。私達のようなゴミを片付ける係りだとか。七人の侍じゃないですけども、まさに私は七人の侍だと思ってやっています。色んな得意な人達の力を集めると、結構無理なく色んな事が出来ちゃ

うんだと。それが私達が今やってる活動の根底にある訳ですから、みんなの得意を合わせて、こんな事ができる、そして誰もそんなに苦勞はしてないと。みんな得意な事だけですからね。

それで、あと今もう一つ大事なのが、「部外者」や「よそ者」ですね。これもまちづくりではよく出て来る言葉ですけども、とても大事で、私達が常盤平に入ってる一番の理由は既存の人達が、環境を変える事が出来ないと思うからです。例えば自治会と商店会だけでは、中々既存の環境って変えられません。ですから、私達の様なよそ者が入って、そこにアートだとかそういった物を取り入れて活動を作っていく。

本当に「アートパーク」というのは、「私達の夢と希望」だと思います。何が夢と希望かって言いますと、私達色んな所でまちづくりをするんですけど、一生懸命やってるスタッフがやっぱり年齢層が高かったりするんですね。でも私達のまちづくりっていうのは将来に向けて、子どもや孫の為にやってる訳ですから。この「アートパーク」は、子ども、家族連れの子も達が沢山集まって、楽しくやっていると、その様子は本当に理想のまちづくりの形なんです。

ですから「アートパークは、私達の夢と希望」ということで、話が終わるんですよ。どうもありがとうございました。

大 成：素晴らしいですね。それでは最後、石川さんよろしくお祈りします。

石 川：はい。では発表させていただきます。私は「アートパークとはみんなが育つ輪」だという事でちょっとお話をさせていただきます。ハーモニーは実は「アートパーク」が始まった時から参加させて頂いていて、2008年の「集まれ！アートパーク～公園改造計画～」ですね。そこから参加させて頂いています。先程大成先生の方から初回は80名という参加人数でしたとありましたが、私の感想としては「沢山人が来たな」という印象がありました。あれから10年経ったんだっていう事と、とても内容も充実してきて、地域の子も達も7月になると「アートパークあるよね」と言っていて、地域のイベントになりつつあるのかなと感じています。

大きく変わったのは参加する年齢層ですね。乳児

親子さんから小学生、また、参加する側と提供する側が今度は中学生が入ったという事で、年齢層もとても幅広くなったと思いました。ただ、私としては、当初は地域子育てネットワーク枠みたいなものから入っているの、何をどういう風にここで展開していけばいいのかなっていう事を、すごく考えていました。普段の活動から中々そういったプランなんかもないですし、ノウハウもなく、アートで子どもと遊ぶ？アートで、アートでっていう感じで、ほんとにその「アート」という言葉に縛られていて、私達が出すものがイコール、アートに繋がるのかな？といった部分がありました。

ただ、中央公園ですね、本来、子ども達や子育て家庭が安心して過ごせる場であるはずなのに、活用されていない時期だったり、ちょっと汚れてたりもしてましたので、なんかそういった公園ではなく、これきっかけに地域の公園になっていけばいいかなと思い、積極的に「アートパーク」に参加させて頂いています。

もちろん今は、回を重ねるごとにアートという分野が、本当はすごく身近で、幅広い意味を持っている事を学びました。

それと、生活とか、生きていく事自体がアートなんだという事を感じております。

少しだけ団体のお話をさせて頂きたいと思います。普段私達は、子育て関係の施設の運営を主にやっております。親子や子ども達が日々遊びに来たりとか、相談しに来たりとか、そんな場をスタッフと共に運営しています。ここ数年は、外遊びの必要性や地域との交流などを目的に、広場などで公園遊びや、「森の子ども館」などの野外活動なども展開しております。私達の日々の運営から見える事は、孤立化している子育てや子ども達、安心して遊べる場、体験の場、交流の場が少ない、大人が遊びを知らない、遊びの体験をしていない事です。思いっきり体験する機会の減少、日々の子育てが忙しい等。中々遊びの提供という所が難しいというような状況を感じておりました。先ほどのフリップに、「アートパークは子育て支援、子どもが育つ場」という意味のことを書きましたが、本当に子どもの遊びや、遊びを通しての体験、交流の場が確保されている場であると感じています。「アートパーク」は、普段大切にしている事

がより一層実現する場であって、伝えられる場ではないかと思っています。

子どもから見ると、親以外の人と触れ合う事、あと、体験を含む遊ぶ事が保証されている場。

親からすると、子どもの楽しい様子、その様子を見て成長を感じられる。日常の子育ての負担感や孤立感の軽減、親自身の遊びに対する意識の変化。地域には子どもや子育て家庭の存在の周知。よく言われることですが、社会で子どもを育てて行こうという事をまさしく実践できている場ではないかと思っております。

「アートパーク」における、子ども達の様子を具体的に紹介したいと思います。いつもハーモニーはカブラで参加をしているのですが、子ども達が最初はめいめいに何作ろうかなとか、1人1人どこまで高く積めるかなという様になるよう活動をしています。ただ、それぞれがだんだん満足していくと、さっき、渡辺あてなさんもおっしゃった、大学生のボランティアスタッフや、もちろん私達もそうなのですが、声を掛けると、その子ども達が集まり始めるんですね。今度は、この写真に見られるように、誰ともなく自分達のポジションを作って大きな物を作り上げています。カブラで、これ「ナイアガラ」って言ってるんですけども。これ1人でも崩してしまうと、全部崩れていってしまうので、いつの間にか、子どもと子ども、子どもと学生、また子どもと学生と私達。子どもと学生と私達と親。本当に色んな交流の成果がこういった形になります。特に子ども達もここで知り合った子ども達なので、「ちょっと気を付けてよ」とか、「そこ持っててよ」とか、自然に声が出ている制作の場がカブラではとても見られます。で、実際にこんな感じですね。こんな巨大なものが出て来て、これ1本抜くとカラカラカラッと崩れます。で、この時に、親の参加は遠目から見てる方が多いんですけども、実際にこれがカラカラカラッと倒れた時には親も子どもと一緒に笑顔で、なんかそこで一体感ですかね、そういったものが生まれる時間になります。

毎年、私達も参加するにあたって、少しずつ形を変えたりだとか、場所を変えたりだとか、最初はシンプルな形で参加を始めて、だんだんそこに学生さん達が、入って来てくれて、入口のこういった看板を作ってくれたりだとか、飾りを一緒に作

りましょうとか、そういった流れになってきています。今年は広い所を使わせて頂いて、カブラ、プラス遊具で遊びました。また、おむつ替えコーナーとか授乳コーナーとかを設置しながら、家族が利用できる場の提供を心掛けているというような形です。

以上です。ありがとうございました。

大成：ありがとうございました。では最後、会場の皆さんと語ってみたいと思います。今まで発表された方の発表で、質問があるとか、ご意見があるとかでも結構です。普段一緒に活動している方にたくさん来て頂けたので、お話し聞いたらいいかなと思うんですけども。いかがでしょうか。

それでは、「保育園きぼうのたから」の石川さん。石川さんにとって、「アートパークとは？」ということでお聞きしたいです。急に振られると難しいかもしれないですけども。皆さんに、この小さい紙をお配りしました。最後アンケートの代わりにしたいと思ひまして、アートパークについて書いて頂けるとありがたいです。

石川：「保育園きぼうのたから」石川康代と申します。よろしく願い致します。私共は、今は閉鎖してしまったんですけども、認可外の保育施設「KEYAKIDS」で始め参加させて頂きました。KEYAKIDSから認可の保育園に移行しまして、今は「きぼうのたから」と、「きぼうのつばさ」で参加させて頂いています。今日皆さんのお話を聞いていて、本当に「アートパーク」って改めて色んな意味で深いですし、すごく色んな分野にわたって成果をあげているんだと思いました。私は保育園として参加させて頂いておまして、特に親子の姿をよく見させて頂いていたので、「アートパークとは」って聞かれると、やはり「本来あるべき親子の姿がある場所」だと思います。今、保育士として長年勤めて参りましたが、自分もそうですけども、とても周りの目を気にして子育てをしている、しなくちゃならないと思っている。お母さん達がすごく無理をしている。しつけのために叱ったり、それは子どもの為というよりも、周りの目を気にしての結果だと疑問を抱くことが多いです。私自身も怒ったふりをする事が時々あって、「あんなか嫌だな」って思ったりすることもあるので、そういうものが一切取り払

われて、本当に子ども達が思いっきり自分のやりたい事を、好きなように表現していて、それを親御さんが近くで笑って見ている。「アートパーク」以外では本当にあまり見たことがないような姿を見られるということが本当に奥が深いなと思います。保育園はそういう姿を本来は作る場であると思うんですけど、中々難しくくてですね、「アートパーク」では、「ああ、あのお母さんってこういう表情するんだ」という、いつも見る姿とは全然別の姿を見せてくれたりとか、子ども達も生き生きと輝いているので、本来あるべき親子の姿がある場所だと思います。ありがとうございます。

大成：はい。どうしましょう。あと、どなたかお話いただけますでしょうか。一緒に参加している保育士の方々はいかがでしょう。また違った意見があると思いますので。生沼さんいかがでしょう。その次は、「つばさ」の高木さんをお願いしたいです。

生沼：私も「保育園きぼうのつばさ」で今、保育士として勤務させて頂いているんですけど。私もKEYAKIDSからずっと携わらせて頂いて、息子と一緒に参加する機会が多くありました。「アートパーク」は毎年親子ですごく楽しみにしていて、息子も物を作るのが好きなので、夢中になって全部をまわろうとがんばって参加していました。私はアートとは本当に子どもにとって一番自信を作り出せるものだと考えていて、モノを作る時の過程がすごく大切だなって感じています。モノを作る時に考えたり、試したり、すごく自分の中で葛藤している姿というのを見てとても頼もしいと思っています。保育園でも制作をする時に、子ども達もやはり色々な事を試します。その試した事が自分の思い通りになった時の達成感の顔が輝いていて、その笑顔が見られるのが今仕事をしていて、すごく嬉しいです。今日もこの大作を持ってきたんですけど。

大成：大作？何を持ってきたんですか。

生沼：みんなに見せようと。息子が作ったものです。

大成：おおっすごい！

生沼：ダンボールで何か作るっていうのが好きなのは、多分KEYAKIDSの頃から大成先生や北沢先生にも色々な体験をさせて頂いたからだと思います。モーター、これ小学生なんでモーターを手に入れて。

大成：回るの？

生沼：モーターで回るんです、プロペラが。

大成：すごいね。

生沼：このプロペラもここまで回転数を上げるのに何回も実験をされていて。

大成：うわっ、すごいすごい。

生沼：最初はすごくプロペラの長さが長かったんですよ。で、回転の速度が遅くて、自分なりにすごく毎日毎日考えて、昨日の23時ぐらいに短くすれば早く回るって事を発見して、寝ている私を起こして、「見て」と言う。短くすると早くなるんだねっていうのが分かったようです。今日は、この子が持ってきたいと言うので持ってきました。

大成：すごい！

生沼：これをみんなに見てもらおうというのがすごく楽しみで、それが多分自信になってまた、次に繋がっていくんだなっていうのが近くで見ていて私はすごく頼もしくて、やっぱり「アートの力ってすごいな」という風に感じています。なので、この「アートパーク」は、保護者の方とか子どもにとって、すごく大きなものなのではないかと思っています。ありがとうございます。

大成：はい。もう一回見せて。うわっ、すごい。すごいね。それでは高木さんいかがでしょう。

高木：「保育園きぼうのつばさ」の高木でございます。私もKEYAKIDSの時から参加させて頂いて、初めの頃を思い出すと、北沢先生の「ふみふみはんが」で、3人でピアノを演奏したりして、企画する側でもあったんですけど、当日自分たちも楽しんで、「またやりたいな」と思い出す事があります。私は、「アートパークとは夢がかなう場所」じゃないかと思っています。大人もすごく夢中で作っている姿を見れたり、子どもはもうどこかに行ってるんですけど、おうちの人が最後まで作っていたりする姿もあったり、この前の「アートパーク」のふり返りでもお話したんですけども、最初から最後まで宝箱をアートパーク中作って5時間6時間いる子もいたので、そういう集中力とか、徹底的に作れる場が保証されているというのはとてもいい事だなと思いました。

で、私の中でも「アートパーク」は夢が叶った場所でもあるんですけども、北沢先生との話の中で、「お菓子の家を子どもの時から作りたいと思っ

ていた」というお話をさせて頂いた時に、「それいいんじゃない」って言って頂いて、一度「おかしな家」のタイトルでワークショップが実現しました。お菓子の箱を使って「おかしな家」をみんなで作りました。まさに私にとって夢が叶う場所だったと思います。色んな人が携わって、1つの「アートパーク」が出来ている事を改めて感じました。「アートパーク」に関わられてすごく光栄に思います。また来年度も機会があれば一生懸命やらせて頂きたいと感じております。本日はありがとうございました。

大 成：ありがとうございます。じゃあもう青山さんです。青山さんも最初からやって頂いて、どうぞ。なんかお願いします。

青 山：「クリエイティブまつど工房」で榎本さんと一緒に活動させて頂いてます青山と申します。榎本さんと一緒に、私も裏方としてずっと「アートパーク」を見守っているという立場になるんですが、ここにある「アートパークとは」って1つの単語とか言葉には出来ないんですが、僕自身が常日頃から心掛けてることなんです。「枠にはまらない」、「はみ出す力」っていうのを子どもとか、学生さんが発揮できる場であるんじゃないかと思えますね。そういう枠にはまらないって事が出来るっていうのは、学生さんは多分その時を過ぎちゃうと大人になっちゃって、社会人になると中々こういうのが出来づらくなるっていうのがあると思います。これが最後の機会になる人も多いと思います。僕なんかこの年齢なんで振り返ると、若い時にそういう事が出来る場があるっていうのはすごくいいなって思っています。枠にはまらない、はみ出す力っていうのを、僕ら大人とか社会が見守って、本当にこれ以上いったら危ないよっていうのを、見守っていれば、自由にやっていいんだよっていうのを、許してもらえる場だと裏方から見るとそう感じます。私は建築士なんです、ワークショップとかでパスタブリッジをやってるんですけど、どうしても小学校高学年ぐらいになってしまいますと、モノを考えたり、設計していいよってなると、定規を使っちゃうんですね。定規を使い始めちゃうと、綺麗な線は書けるんですけど、枠にはまったモノしか出来なかったり、ちょっと形が整ってるモノしか出来ないんで

すね。そういうのを、小学校中学年から高学年ぐらいの子ども達がだんだんそういう風になってきちゃうんで、そういうモノじゃない、本当に自由にやっていいんだっていう事を、実は大人になってもやり続けなきゃいけないんでしょうけどやって欲しい。感性が磨けて、自由に作れる場という風に僕はずっと「アートパーク」を捉えています。建築やってると、枠からはみ出るって事が常日頃できないんで、お手伝いをするたびに「あーいいな、自由はいいな」っていうのをちょっと羨ましく思いながら見えています。これからも子どもたちや学生さんたちを僕ら大人が見守り続けられればもっといいモノが出来るんじゃないかなと思って、今後もお手伝いさせて頂きたいと思えます。よろしくお願いします。

大 成：ありがとうございます。神田さんいかがでしょうか？

神 田：今日はお話を聞くつもりで参りました。私の立場は「アートパーク」では、「松戸まちづくり会議」として参加させて頂いております。いつから「アートパーク」にまちづくり会議として参加しているか記憶は定かじゃないんですけど、確か3年前は、焼きそばを焼いたり、コーヒーを売ったり、屋台をやったんじゃないかと。それが、一昨年はやらなくて、昨年と今年は、シャボン玉をしました。実は私、シャボン玉やるって決まった時に、果たして皆さんの創造性のあるアートではないんじゃないかと思えました。ということで若干工夫を加えまして、今年は、より割れにくいシャボン玉を作りました。岩瀬自治会でシャボン玉をいくつか研究しまして、配合率とか考えて、固いシャボン玉や大きなシャボン玉が出来るよう工夫をしました。そうしたら単純に子どもはシャボン玉を喜んでくれますんで、2年連続シャボン玉で参加させてもらっています。

これ、やっぱり少し言い訳なんですけども、松戸まちづくり会議というのは、松戸駅周辺の11町会自治会から構成されるボランティア組織です。町会のおじさんも入ってる組織でございまして、地域を越えたまちづくり、活性化という事を目指しています。

実は目の前にいらっしゃる森さんたちのPARADISE AIRも松戸まちづくり会議の一部だったんですね。

あとは町の活性化っていう事でイベントを仕掛けてまいりました。7月の西口公園でのビアガーデン、8月の松戸中央公園の「ラストサマーフェスタ」。それから、数年前からは3月に防災フェスタ。そういった3つのイベントを中心に活動しています。2016年の7月からはPARADISE AIRが独立しました。したがって去年、今年と、松戸まちづくり会議はイベント中心ですかね。でも一部アーティストの受け入れを松戸まちづくり会議がやるという風になってきてます。

言い訳といいますのは、7月のビアガーデン、8月の盆踊り、そちらに集中してですね、「アートパーク」の時期は大変忙しい時期でもあって、形ばかりシャボン玉で参加させて頂いてます。というのが実情でございます。

私自身は町会の役員やってるんですけども、やはりお年寄り子ども達が輝いている事が大前提だと思っています。

その中で「アートパーク」へ参加させて頂いて、キラキラと目を輝かす子ども達、その子ども達を見守るお父さん、お母さん。表情を見ていますと、「ああ、これいい形のモノになってるな」という風に感じています。皆様方の活動に敬意を持って参加させてもらっています。以上です。

大成：どうもありがとうございました。

大成：年々シャボン玉のレベルが高くなってきてすごいと思っています。では宮澤先生にもお願いしたいです。

宮澤：こんにちは。埼玉県の新座市で小学校の教員をやっております。今は6年生を担当して大変色々苦勞しています。去年1年間、大成先生の所で子どもと図工美術について勉強させて頂いて、「アートパーク」にも参加させて頂きました。

「アートパーク」に参加して思った事は、この「アートパーク」を原体験として成長していったら、この子ども達はどんな大人になるんだろうっていう事をすごく感じていました。

「アートパーク」は混沌としていて、色んなモノが入り混じっていて、色んな人がいて、遊びが沢山あります。しかし、いつも子ども達と接していると、今の子ども達には遊びが足りないなっていう風に感じる事がいっぱいあって、こういう所で、心を開放して遊んでいる子ども達を見ていると、

こういった原体験を持っている子ども達というのは幸せだなと思いました。

大成：ありがとうございました。

大成：じゃあ渋谷さん。学生として参加してどうでしたか。

渋谷：大成ゼミの3年、渋谷と申します。今年初めて「アートパーク」に参加しました。普段から地元の小学校でボランティアをしていて、小学生と関わる機会はあるのですが、普段の小学生とか子どもって自由過ぎたり、好きな事やると、あまりまわりから、良い目で見られないというか、白い目で見られる機会が多いと思うんです。でも「アートパーク」の場合は逆に、他の子と違った考えを持ってたりとかやってみたいっていうのが強い子が、ほんとに、よく輝いてる場所だと思います。あと、今日色々な方のお話を聞いていて、色んな人が学べる、楽しい場所だと思っていました。

大成：ありがとうございました。

大成：じゃあ次は、「アートパーク」に参加してはいないけれど、今のお話を聞いて、感想をいただけたらと思うんですけど、いかがでしょうか。質問でもいいです。

男性：皆さんのお話をお聞きして、色んな写真とか見てですね、すごく楽しそうだなと思いました。子ども達にとって本当に個性豊かになれる場所だと。あと、携わっている方々も皆さんすごく楽しそうにやってるんだなっていうのが、皆さんのご意見お聞きして思いました。以上です。

大成：じゃあ、上田先生いかがでしょうか。

上田：ごめんなさい、私も地元で地域活動をしていて、この時期に丁度忙しかったりするので、実は参加した事がなくて。ただ、同じ地元でこうしてネットワークで何かをするというイベントを私もしてるんですけども、やはりアートという切り口がとてもいいんだなと思いました。

アートって非日常というか、日常からはみ出すって事だと。こういう活動で、うちの子どもも、砂とか水とか日常生活の中で、抵抗があったりするんですけど、カチッとスイッチが外れると「わー」となって。非日常の中で、子ども達の様子を見て親御さんもいつもと違う子どもの姿を見たり、公園もいつもと違う風景を見せてくれるとか。アー

トという切り口で、みんながはみ出した非日常になるのが、とても爆発力のある事なのだと思います。

あと、私も大学の人間で、教育の成果を先ほど北沢先生のお話じゃないですけど、短期的に求められることが多いと思っています。先程、森先生がおっしゃっていた、種まいて10年後、20年後に花開くかもみたいな、そういう長いスパンで教育をとらえる事が出来るような時代だったらいいのにと感じています。先程シラバスの話がありましたが、短期的な事を求められるんですけど、実際はそういう事じゃないんじゃないかと思っています。

大成：他にどなたかいらっしゃいますか。はい、どうぞ。

渡辺：お疲れ様です。自分で考えてもわかんない事で、もう一つみなさんにお聞きしたい事があります。先程「学生がアートパークに必要なかどうか」という質問したんですけど、もう一つありまして、私の中では問題解決能力とか、社会人基礎力とか、意識してやれば絶対成長すると思っはいるんですけど、意識したら楽しくなくなっちゃうんじゃないかなっていうのもあって。だからこの楽しさと成長の釣り合いがわからないです。私、「アートパーク」以外にも「ジュニア夢カレッジ」の方でイベントの企画立案とか運営とかをやらせて頂いていたんですけど、その時は完全に学生を育てる、社会人基礎力を育てるっていうことを意識してやってたんですけど、「アートパーク」でもそれを意識してやれば育つと思うけど、どうなのかなって思って、それを先生とかに聞きたいです。

大成：そういった力を意識すれば、それはそれですつけられるとは思いますが。社会人基礎力という言葉とは少々違うかもしれませんが、「アートパーク3」ぐらいかな、教育学の柴山先生とは、かなり早いうちから一緒にやってたんですけど、先生から「アートパーク」で、こちらが「一緒に遊ぼうよ」と口で言ってもあまり子ども達って来ないんだっていう事が分かってきたと。実は学生が自分達で楽しんでやっていると「何やってるの」と近寄って来るんだって事が徐々に分かってきたんです。なので、まずは学生が楽しんで、その姿を見せる事が子どもと関わる一歩であると。だから、子ど

もと関わる仕事に就く学生には、基礎力の一つとして実践できていると思います。「子どもを支援する」という言葉、学生の多くが感想で書いてるんだけど、なんかそういうマニュアル的なものではなく、一緒に作ってみたいくなる時間とか場とかを、その場で考えて協働で作り上げられることが大事な力なんじゃないかと思っています。それが達成できた時、みんながハッピーになっている気がするんですね。なかなか「アートパーク」全体の企画をしないと、ついた力を自覚するのは難しいかもしれません。2年越し、もしくは次の活動も含めて力がつくようにとは考えていますが。

渡辺：ありがとうございます。あの、「アートパークとは」について横で渋谷さんがとてもいい事書いています。

大成：渋谷さんが書いている事はなんですか。

渡辺：それを見て「あれ？私の考え方違うかも」と思いました。

渋谷：私は「自覚せずに学ぶのがアートパーク」かなって思いました。色んな人のお話を聞いていて、保護者の方も子ども、例えば佐藤さんが言った事だと、子どもについて受け入れるとあって、そういうのは普段やろうと思ってもなかなかできなかったりとかあると思うんですけど、「アートパーク」ではそういう事が出来る場になっているかと。子どももアートを気づかぬうちに楽しんでやっています。あと、さっきシギットさんが言っていた空間の事とか、未来への投資の話で、その場でなくてもいつかは学びになったりする事とか。自分で考えてなくても学びになっているのが「アートパーク」かなって思って。私にとってもあてな先輩の今の話だと、運営側なので「子どもを助けないと」とか、「頑張らないと」とって思ってたんですけど、思ったより全然できなくて。でも子どもが色々アクションを起こしてくれるので、そのアクションにどうやって関わっていけば一番楽しくできるんだろうとか当日やりながら考えてやっていました。例えば、ギリギリ立てる小さい子への支援だったら、一緒に何かをやる事がいいと思えましたし、小学校の中、高学年にはガムテープを切って渡してあげるのが、制作のスピードに適してるなと思ったり、逆にもうちょっと学年が低いと、ガムテープを切るのが楽しかったりするんで。

そういう年齢や学年，その子に合わせた支援をしていくというのは，今これ何をやるのが一番いいんだろうっていうのを考えて実行することが学びになったので，意識しなくても，こうしてあげたいというのがあったら，学びにはなるんじゃないかなって思います。

大 成：なるほど。

ワークショップの中で，何を判断し，やっていかないといけないか，そういう事をみんな瞬時に考えて動いてくというのが当日のあの場だと思うんです。それが「アートパーク」の学び方なんですよ。今までの学習や，10回行って来た蓄積があるから事故も無く対応できていると思います。それでは，時間になったので，まとめたいと思います。最後に「アートパークとは？」の問いに対しフリップには書いていませんが言わせて下さい。私はずっとアートパークは「学びの共同体」だと思っています。

「アートパーク」を企画から実践する中で，みんなで学びあう事で，地域力が上がったり，大学の学びの内容が充実したり，そういった事がこの「アートパーク」ではずっと行われ，更新されてきている。だから続いているのだと思っています。共同体と言いましたが運動体かもしれません。単にイベントをみんなで企画し，実行しているというレベルではないと思っています。

来年で「アートパーク」は11回目になりますね。

また継続して，より良い「アートパーク」を皆さんと作れたらと思います。色々意見交換しながら作っていくのが，「アートパーク」の面白いところであると思っています。渡辺さんの発表でもありましたが，やった後，課題が生まれ，また次やりたくなるというのを繰り返して10年を終えた感じ。また次もより良いモノを考えて，みんなで楽しんで実現できたらいいと思います。

「アートパーク 11」皆さん，またよろしく願いいたします。

今一度，今回の発表者の方々に暖かい拍手をお願いいたします。

それでは終わりにしたいと思います。本日はお疲れ様でした。

(座談会実施日 2017年10月1日)